

学生のボランティア体験が 教職志望意識に与える影響（第一報）

—佐倉・八街市通学合宿への参加を通して—

吉 村 真理子

The Influence of Student Volunteer Experience on the Desire to
Become a Teacher

—Educational retreats conducted by Sakura and Yachimata Cities—

Mariko YOSHIMURA

異年齢の子どもたちが、地域の施設で一定期間寝食を共にしながら学校へ通う「通学合宿（佐倉・八街市）」に、本学学生がボランティアとして参加した。その体験が、教職志望意識に与えた影響について、「教員に必要な資質」「子どもたちに必要な生きる力」「子ども観の変化」などについての認識の変化を、彼らのレポートからまとめる。

I 問題と目的

昨今、子どもにとっての生活・自然体験活動の必要性が叫ばれている。

1996年7月に出された中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、現在の子どもたちについて、「テレビなど、マスメディアとの接触にかなりの時間をとり、疑似体験や間接体験が多くなる一方で、生活体験・自然体験が著しく不足し、家事の時間も極端に少ないという状況がうかがわれる」と述べられている。

また、同答申において、はじめて、変化の激しいこれからの社会のなかで、子どもたちが身につけていくべき「生きる力」について、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である」と定義づけられた。

さらに、1998年6月に出された同審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために 一次世代を育てる心を失う危機」では、この「生きる力」の育成を推進するため、家庭、地域社会、学校、民間団体そして国や地方公共団体のそれぞれがなすべき取り組みについて、広範囲にわたる提言がなされた。そのなかには、小学校以降の学校教育の役割の見直しと題し、「子どもたちに信頼され、心を育てることのできる先生を養成しよう」と謳われ、教員養成カ

リキュラムにおいて、教え方の指導や子どもとの触れ合いを重視する観点から、ボランティア体験等の体験活動を積極的に取り入れていくこと、また、教員採用に当たっても、同経験等の有無を重要な資料とすることが求められている。

平成10年度(1998年)より、義務教育教員免許状取得には、従来の教育実習の他に、特殊教育諸学校での2日間、社会福祉施設での5日間、あわせて計7日間の介護等体験が義務づけられたのも、同様の動きといえるであろう。

続く生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ ―青少年の生きる力をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について―」(1999年6月)においては、「生活体験・自然体験が豊富な子どもほど道徳観・正義感が充実している」という調査結果が引用され、子どもたちにさまざまな体験の機会を意図的・計画的に提供していくため、行政だけでなくNPOや民間団体の力を借りての取り組みが緊急に求められているとした。その実現には、子どもたちの活動を支援するリーダーが多数必要となることが予想されるため、答申では学生や社会人の登録制度をつくることについての言及もなされている。

本学の拠って立つ佐倉市においては、上記のような流れの一環として、市教育委員会生涯学習課が、平成13年度より「通学合宿」を実施している。通学合宿とは、異年齢の子どもたちが地域の施設で一定期間寝食を共にしながら学校へ通う活動である。日常生活の基本をできるだけ子どもたちだけで行うことで、子どもたちに不足している生活体験をさせるものである。

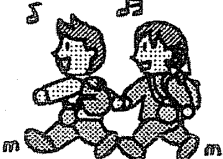


この事業のねらいは、以下の3つの対象について、それぞれ掲げられている。

子ども：親元を離れて共同生活を体験することにより、自主性・協調性を高め、心豊かでたくましく生き抜く力を育む。

家庭：日頃の親子関係を見直す中で、家庭の教育力の向上を目指す。

地域：地域の住民が子どもの様々な生活体験に関わることにより、地域のつながりを深める。

G小学校が実施した通学合宿の日程表（6泊7日）を、以下に記す。

	10月2日(土) 1日目	3日(日) 2日目	4日(月)～7日(木) 3日目～6日目	8日(金) 7日目
6:00		—起床—	—起床—	—起床—
7:00		・朝食準備・朝食 ・片付け	・洗面・朝食準備・朝食 ・片付け・登校準備	・洗面・朝食準備 ・朝食・片付け
7:30		—登校—	—登校—	・大掃除
12:00	—受付—	<div>敬老会に参加</div>	<div>学校生活</div> 	・修了式(11:00)
13:00		—下校— ・市民風呂入浴&食材 買出		—解散— 
16:00		・PTA夕食作り		
18:00	・開講式(13:30～) ・オリエンテーション ・荷物整理 ・話し合い (班編成・献立決め等)	・食材の買出し ・夕食準備 ・地方の方のお話 ・夕食(PTA地域の方 と一緒に) ・片付け ・自由時間 (学校の準備)	—下校— ・食材買出し・夕食準備 (2つの班で同時進行) ・夕食・片付け ・入浴・話し合い ・自由時間 (学校の準備)	
21:00	・夕食・片付け ・入浴・話し合い ・自由時間 (学校の準備)	・夕食準備	・就寝時間	
21:30	・就寝準備 ・就寝	・就寝	・就寝	

本学では、同課の要請を受けて、学長の許可・教授会承認のもと、平成14年度より学生ボランティアの派遣協力を行っている。また、佐倉市に隣接する八街市においても、同様の事業をこの17年度より実施するに当たり、本学に学生ボランティア派遣要請があり、しかるべき手続きを踏み、協力を行った。昨年度、八街市が、佐倉市の事業を視察訪問した際、本学学生のボランティア参加の様子を観察し、今回のボランティア派遣要請につながったという

わけである。

参加学生は、いずれも小学校教員志望クラスに所属する学生、あるいは同志望の科目等履修生である。短期間ではあるが、子どもたちと生活を共にするなかで、子どもたちの著しい成長を目の当たりにし、また、教えることと見守ることや、個別指導と全体指導との切り替えの難しさ、個に応じた言葉かけや仕事と遊びのけじめをつけたメリハリのある指導の重要性を実感している。そして何より、真剣に責任を持って子どもたちと向かい合うことの尊さを学んでいるといえよう。

本研究では、学生たちが通学合宿体験を通して得た知見、特に「教員に必要な資質」や「子どもたちに必要な生きる力」についての認識、あるいは「子ども観の変化」などについて、レポートを課した結果をもとにし、まとめてみたい。

Ⅱ 調査方法

1. 対象

千葉敬愛短期大学学生 8 名（男性 5 名、女性 3 名）

いずれも、1 年次〔佐倉市立 N 小学校・U 小学校（いずれも 3 泊 4 日）〕と、2 年次〔G 小学校（6 泊 7 日）八街市立 K 小学校（3 泊 4 日）〕において、各 1 回ずつ通学合宿を体験している。また、2 回の通学合宿の間には、教育実習〔小学校（4 週間）7 名、幼稚園（3 週間）1 名〕を体験している。

2. 時期

平成 16 年 10 月

3. 内容

通学合宿終了後、2 週間以内に、ボランティア体験についてのレポート提出を課した。

内容として、「子ども観の変化」「教員に必要な資質」「子どもたちに必要な生きる力」について記載するよう教示した。

Ⅲ 結果と考察

レポートに表現された内容を、以下にまとめる。なお、「」内は、学生の記述の引用である。

1. 子ども観の変化

「きつい言葉遣い ex. キモイ、うざい、ムカつく」や「思春期特有の難しさ ex. 男児と女児

が分裂してしまいがち、男性リーダーは女兒から、女性リーダーは男児から、それぞれ拒否感を示されたり、避けられてしまう」といった子どもたちの実態に戸惑いながらも、「子どもは短期間で変わる」「子どもはすごい、素晴らしい」というように、自己中心的から協調的へと変貌を遂げた子どもたちの成長を、間近で見ることができた感動を述べている。

また、改めて「いろいろな子どもたちがいる」と、子どもたちの個別性、多様性を実感したようである。

2. 教員に必要な資質

（1）子どもに語りかけることばの重みを知る

「指導者の気持ちを子どもに伝える難しさ」を実感し、子どもの心に届くことばの選び方や使い方を、学生同士でお互いに見て学んでいるようであった。教師の重要な教育技術である、ほめ方や叱り方のTPOを体得すること、公平であることの重要性についての認識も深まったようである。

また、大人の発する言葉に対して、子どもたちは敏感に反応し、真似したりもする。そのような影響力の大きさに改めて驚き、自省する様子もうかがえる。

（2）子どもたちとの信頼関係

「子どものためを思い、子どもたちに対して本気で向き合えば、自分たちを受け入れてくれる」という確信を持つことができ、「叱ると嫌われてしまうのではないかという恐怖心がなくなった」と手応えを感じている学生が多くいた。

また、「子どもの意見を活動に積極的に採り入れていくことで、子どもは自信をもつことができる」という気付きも述べられている。

（3）全体への配慮

「教育実習を体験してから、目の前にいる子どもだけでなく全体に目を配ることができるようになった」という学生が多くいた。

「性別に関係なく接し、見過ごしがちな大人しい子にもよく話しかけ、積極的にかかわりを持つ」ことの重要性を指摘していた。また、実行委員の方々のご指導のもと、子どもたちに「今、自分たちは何を学ぼうとしているのかという目当て、目標を持たせる」ことが、事故を防ぎ、事業を成功させる鍵だと学んでいる。

3. 子どもたちに必要な生きる力

「周囲の状況と時間を考慮して、今、自分は何をしなければならないのかという具体的な行

動のプランを立てること」、「自分のためだけでなく、全体のためになることをすすんですること」などが挙げられている。

「何すればいい?」といちいち学生リーダーに尋ねていた子どもたちが、「これやっとうか?」といいつつ、自ら動くようになったという。

さらに、このような力を身につけさせるためには、学生が一方的に指示するのではなく、子どもたちに問いかけ考えさせることを、繰り返し行うことが有効であると体得している。

IV まとめ

以上の結果から、通学合宿へのボランティア参加が、学生たちに与えた効果について以下にまとめる。

1. 教職志望意識の高まり

「子どもたちと触れ合う良い機会」を得て、「教員の仕事の大変さ」についての認識を深めつつも、「教師を目指す決意が強くなった」という学生が大半であった。

2. 教員間チームワークに関する重要性の理解

子どもたちが、安全にかつ楽しく有意義な集団生活を行うためには、本事業が子どもたちの教育活動の一環であることを強く認識する必要がある。「事故は、指導が空白になる時間帯に生じる」とは、実行委員の方々から、繰り返しご指導いただいた点である。

また、子どもたちの状況については、随時、実行委員の方々に報告し、指導・助言を受けながら、事業を運営していくことが必須となる。チームワークには、報告、連絡、相談いわゆるホウ・レン・ソウが大事といわれる所以である。その重要性について、身をもって理解したといえるだろう。

3. 児童理解の実践

生徒指導は、「児童理解に始まり、児童理解に終わる」といわれている。一人ひとりの児童は、家庭環境、発達段階、性格・行動様式等、すべて異なっている。児童理解を進めるためには、できるだけ多くの時間を児童と共有することが欠かせない。学級においても、学習のみならず、話をする、遊ぶ、スポーツをするなど、特に小学校教員は常に「児童の中にいる」ことが大切であるといえよう。

子どもと寝食を共にし、長い時間を共有する中で、いろいろな話を交わしたようである。話の内容の深さについては個人差があるが、悩みを学生にうち明けた児童もいる。

4. その他

前述の通り、今年度より新たに通学合宿事業を開始する八街市から、本学学長を通して、通学合宿経験者である学生に対するボランティア派遣要請があった。学生のレポートでは、前年度の佐倉市での体験を生かし、八街市の通学合宿を円滑に行うために、さまざまな提案を積極的に行った様子が報告されている。例えば、「子どもたちが常に時間を意識して行動できるよう、見やすい位置に時計を取り付けてほしい」「廊下や階段に注意を促す貼り紙をしたい」「しーっと口に入差し指を当てたら、お話しするよの合図だからお互いに注意し合おうという約束をし、伝達事項が浸透するようにしたい」などである。

V 終わりに

千葉県教育長期ビジョン「千葉の教育“夢・未来2025”」（1999年）では、「子どもたちが、新しい時代に向けて扉を開き、社会や環境に積極的に働きかける力を身につけ、未来に向けて夢を持つことのできる教育の実現」を目指し、千葉県が求める教員像として以下の4点を挙げている。

①人間性豊かで、教育愛と使命感に満ちた教員

一人とのかかわりの大切さを理解し、自ら実践し、指導できる人―

②児童生徒の成長と発達を理解し、悩みや思いを受け止め、支援できる教員

―子どもの視点に立ち、子どもの行動や変化をとらえることができる人―

③幅広い教養と学習指導の専門性を身につけた教員

―児童生徒の実態に即した指導、わかりやすい授業をこころがける人―

④高い倫理観を持ち、心身共に健康で、明朗快活な教員

―社会規範をしっかりと身につけ、保護者や地域社会から信頼される人―

これらは、教育職員養成審議会第三次答申（1999年）の中で示された「教員に求められる資質能力」を受けてのものである。

通学合宿へのボランティア参加が学生に与えた影響を考えると、本事業へのボランティア参加は、①から④に謳われている各素養の育成に資する実践活動であると考えられる。また、学生の観念的・抽象的な自己理解に具体性や現実性を与え、進路適性について改めて吟味させる機会としても、機能しているといえるだろう。進路指導でいうところの、いわゆる「啓発的経験」である。

今後とも、全学の共通理解を図りながら、両市との連携・強化を進め、学生たちに有益な体験学習の機会をより多く提供できるよう、取り組んでいくことができればと考えている。また、次年度は、アンケート調査等の実施により、学生たちの変化を数量的にとらえる試みを行っていく計画である。

＊本研究は、平成 16 年度千葉敬愛学園研究プロジェクト補助金の助成を受けている。

【引用・参考文献】

- ・「生徒指導をめぐる学級経営上の諸問題」（小学校生徒指導資料 6 集） 文部省 1989
- ・「小学校における教育相談の進め方」（生徒指導資料 79 集） 文部省 1991
- ・「21 世紀を展望した我が国の教育のあり方」（第 1 次答申） 中央教育審議会 1996
- ・「21 世紀を展望した我が国の教育のあり方」（第 3 次答申） 中央教育審議会 1997
- ・「新しい時代を拓く心を育てるために 一次世代を育てる心を失う危機―」（答申） 中央教育審議会 1998
- ・「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（第 3 次答申） 教育職員養成審議会 1999
- ・「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ ―青少年の生きる力をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について―」（答申） 生涯学習審議会 1999
- ・千葉県教育長期ビジョン「千葉の教育“夢・未来 2025”」 千葉県教育委員会 1999
- ・「平成 14 年度 生徒指導充実のための方策」 千葉県教育庁学校指導部指導課 2002